

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 27 年 5 月 2 日現在

機関番号：32634

研究種目：基盤研究(C)

研究期間：2012～2014

課題番号：24520553

研究課題名(和文) 名詞句の左端部における言語事象に関する研究

研究課題名(英文) A Study on Linguistic Phenomena in the Left Periphery of the Noun Phrase

研究代表者

濱松 純司 (Hamamatsu, Junji)

専修大学・文学部・教授

研究者番号：20272445

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 1,400,000円

研究成果の概要(和文)：名詞句の左端に関わる言語事象を研究対象として、生成文法理論を理論的枠組みとして、文と名詞句の並行性を明らかにするとともに、両者の違いに対して理論的な説明を与えた。英語を中心としながらも、比較統語論の観点からゲルマン・ロマンス諸語を広く調査し、英語名詞句の左端に関わる言語事象を浮き彫りにした。90年代における名詞句研究を最新の理論において見直したという意味を持つ。

研究成果の概要(英文)：This study has investigated varieties of linguistic phenomena concerning the left periphery of the noun phrase, in the framework of generative grammar and has proven the parallelism between the sentence and the noun phrase. Although the main focus of the study has been English, some other Germanic and Romance languages have been investigated, with the result that a wide range of linguistic phenomena regarding the left periphery of the noun phrase have been made clear. It also cast a new light on the research of the noun phrase in the recent development of generative grammar.

研究分野：英語学

キーワード：英語学 統語論 生成文法 名詞句

1. 研究開始当初の背景

(1)生成文法理論研究において、名詞句と文との並行性は、理論の初期から現在に至るまで、最も重要なテーマの一つであるが、名詞句と文との並行性を保証するものは何かを特定することが必要である。各言語における研究で、DPはCPに相当するものであることが明らかになってきた。EPP素性のパラメータ化によってゲルマン・ロマンス語間の違いを説明する試みは、名詞句研究にとっても重要な意味を持つものと思われる。文レヴェルでは、文の左端部に関わる言語事象の研究が活発に行われている。名詞句の左端部においても文の左端部と同様に、話題化や焦点化にかかわる機能範疇が存在するという主張もされている。

(2)このように、80年代・90年代における研究の蓄積とミニマリストプログラムにおける研究成果を基盤として、近年の名詞句研究においては、名詞句の左端部に関わる事象に注目が集まっている。自らの研究成果をより発展させ、名詞句の左端にかかわる言語事象に関して、より包括的な研究を行うこととした。

2. 研究の目的

(1)本研究の目的は、主に名詞句の左端に関わる言語事象を研究対象として、ミニマリストプログラムを理論的枠組みとして、文と名詞句の並行性を明らかにするとともに、両者の違いに対して理論的な説明を与えることである。具体的には、EPP素性がゲルマン・ロマンス諸語においてどのようにパラメータ化されているか、パラメータ化における差異が両者間にいかなる相違を生み出しているか、DPの左端部はどのような機能範疇から構成されているのか、これらの機能範疇の性質がゲルマン・ロマンス諸語においてどのように反映され、差異を生み出すのか、及び名詞句の左端部と文の左端部の構造はどの程度共通点があるのかを明らかにすることが目的である。

(2)これらの問いに答えを出すと同時に、名詞句内においても話題化や焦点化が存在するのか、ゲルマン・ロマンス諸語において、英語の名詞句はどのように位置づけられるのかを明らかにすることを目指す。

3. 研究の方法

(1)平成24年度は、先行研究・データの収集・分析、先行研究・データの分析・検討及び研究打ち合わせを中心に研究を進めた。先行研究の収集は、図書・雑誌の購入と国内外の図書館での閲覧・複写を軸とした。データ収集においては、インターネット、コーパスを積極的に活用し、オリジナルなデータの収集に努めた。オリジナルな成果を挙げるために、データの収集を精力的に行った。収集し

たデータ・先行研究を分析し、考察を加え、詳細に検討した。研究計画を円滑に遂行するため、研究協力者である Ad Neelman 教授(ロンドン大学)を始め、積極的に国内外の研究者の意見・助言を得ながら研究を進めた。

(2)平成25・26年度においては、初年度の作業を継続する一方、研究内容を発展・補完した。学会での研究発表・論文発表を通じ、研究成果を公にし、24年度に続いて、フィードバックを得ながら研究を取りまとめた。取りまとめた研究成果は、論文として国内外のジャーナル・学会誌等に投稿・公表した。

4. 研究成果

(1)名詞句の統語研究は生成文法理論の初期から行われ、とりわけ80年代・90年代に集中的に研究が行われ、内部構造の解明が進められた。その一方で、名詞句の左端部に関しては、未だ本格的な解明がなされていないと言える。本研究は、文の左端部に関する研究成果を生かしつつ、この新たな領域を切り開いたと言える。同時に、言語類型論においても名詞句は研究が盛んな分野であり、豊富な研究成果がある。

(2)本研究はこれらの成果をも意欲的に取り入れることにより、ゲルマン・ロマンス諸語の内、なるべく多くの言語を対象として、理論的に分析した。インターネット及びコーパスを使った独自のデータ収集に加え、ネイティブスピーカーへの調査も積極的に行い、データの質と研究の独創性を高めた。

(3)本研究においては、対象とする言語は英語を中心としながらも、比較統語論の観点からゲルマン・ロマンス諸語を広く調査し、英語名詞句の左端に関わる言語事象を浮き彫りにすることに成功した。GB理論における名詞句研究は豊富な研究成果の蓄積があり、ミニマリズム理論はこの豊富な遺産に新たな光を当てるものであると言えるが、本研究はミニマリズム以前の生成文法理論研究、とりわけ80・90年代のGB理論時代の遺産に光を当て、ミニマリズム理論において見直すものとしての意義を持つ。

(4)本研究が明らかにすることを目指したものは、主として、EPP素性のパラメータ化と言語間の相違における役割、DPの左端部の機能範疇の性質と言語間の差異、及び詞句の左端部と文の左端部の共通点の3点である。以下、これらの3点における研究成果について述べる。

EPP素性のパラメータ化と言語間の相違における役割: Alexiadou and Anagnostopoulou (1998)の研究を土台に、自らのこれまでの研究成果を発展させる形で研究を進めた。受動化など、名詞句内におけ

る移動現象を手がかりとして研究を行った。名詞句内の受動化において、名詞化に関わる接尾辞が受動化の認可に深く関わっていることを明らかにした。更に、移動先がD(主要部)であるか、それともDの指定部(句)であるかをパラメータ化することで、名詞句の左端部への移動において観察される言語間の変異が導かれることを示した。具体的には、ロマンス諸語は前者、英語を含むゲルマン諸語は後者のタイプに属することを明らかにした。

D Pの左端部の機能範疇の性質と言語間の差異: Rizzi (1997)を出発点として、分離C P構造を踏まえつつ、Aboh 2004 及びHaegeman 2004 を手がかりに、D P左端部のより精緻な構造を検討し、話題化等、文の左端部に見られる現象が名詞句内にも存在する言語とそうでない言語とを区別・説明した。この現象は英語では観察が困難である為、アルバニア語、ブルガリア語及びギリシャ語等の言語をAlexiadou, Haegeman, and Stavrou (2007)を出発点に調査した。その結果、これらの言語では話題化及び焦点化が名詞句において観察され、名詞句内の移動という観点から説明されることが分かった。より具体的には、Rizzi (1997)の分離C P構造により、これらの移動の着地点が導かれることを示した。

名詞句の左端部と文の左端部の共通点:
・ の研究結果を基に、名詞句と文がそれぞれ左端部において持つ構造において、どの程度共通性があるのかを検討した。生成文法理論研究において、名詞句と文との並行性は、理論の初期から現在に至るまで、最も重要なテーマの一つである。Xバー理論は名詞句と文との並行性を保証する枠組みを提供し、その後提唱されたD P分析によって、名詞句と文との並行性はより明確に表現されることになった。80年代後半から90年代にかけて、G B理論及び比較統語論の隆盛の中で、各言語における名詞句研究が非常に盛んになり、名詞句内における様々な機能範疇やそれらに関わる主要部移動が提案された。Xバー理論が廃止されたことは、名詞句と文との並行性をア prioriに仮定することがもはや不可能であることを意味する。このため、名詞句と文との並行性を保証するものは何かを特定することが必要である。本研究はこのような問題意識の下で行われたが、生成文法の初期以来、G B理論を経て、今日に至るまで理論上の重要な問題であり続けた、名詞句と文との並行性は、それぞれの領域での左端部において、E P P素性及び分離C P構造によって、理論的な説明が与えられ、ゲルマン・ロマンス諸語における一見複雑な現象が、極めてシンプルな形で導かれることを説得的に示した。Xバー理論による記述から、ミニマリズム理論における理論的

説明へと進歩し、かつ射程範囲も格段に広がった。

(5)本研究を進める過程で、本研究の研究協力者でもあるAd Neelemanは、分離C P構造に批判的な立場から、いくつかの論文を公開した(Abels K, Neeleman A. (2012), Belk, Z. and A. Neeleman (2015))。本研究がこの代案によって説明されるかどうかは、今後の検証を待たなければならない。

<引用文献>

- Abels K, Neeleman A. (2012) "Linear Asymmetries and the LCA," *Syntax* 15.
- Aboh, E. (2004) "Topic and Focus within D," *Linguistics in the Netherlands* 21.
- Alexiadou, A. and E. Anagnostopoulou (1998) "Parametrizing AGR: Word Order, V-Movement and EPP-Checking", *NLLT* 16.
- Alexiadou, A., L. Haegeman, and M. Stavrou (2007) *Noun Phrase in the Generative Perspective*. Walter De Gruyter.
- Belk, Z. and A. Neeleman (2015) "AP-Adjacency as a Precedence Constraint," Ms. UCL.
- Giorgi, A. and G. Longobardi (1991) *The Syntax of Noun Phrases*, Cambridge UP.
- Haegeman, L. (2004) "DP-periphery and Clausal Priphery: Possessor Doubling in West Flemish," in *Peripheries*, Adger, de Cat and Tsoulas eds, Kluwer.
- Rizzi, L. (1997) "The Fine Structure of the Left Priphery," in L. Haegeman, ed., *Elements of Grammar*, Kluwer.

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文](計3件)

Junji Hamamatsu, A Short Note on the Impossibility of Raising in the Noun Phrase, *専修人文論集*, 専修大学学会、査読無、96巻、2015、25-32

Junji Hamamatsu, Movement in the Passive Nominal and Nominal Morphology, *The Linguistic Review*, 査読有、30巻、2013、467 - 490

濱松純司, 前置詞の目的語となるwh節の名詞性について、*英語語法文法研究*, 英語語法文法学会学会誌、査読有、20号、2013、182 - 195

[学会発表](計1件)

濱松純司, 前置詞の補部となるWh節の名

詞性について、英語語法文法学会、近畿大学、
2012年10月13日

6. 研究組織

(1) 研究代表者

濱松 純司 (HAMAMATSU, Junji)

専修大学・文学部・教授

研究者番号：20272445